『夜の寝覚』論――「場」からみる人物造型――

安武佑梨

はじめに

『夜の寝覚』における女主人公中の君と、太政大臣邸や石山、広沢といった「場」との関わりについては、先行研究において様々な指摘がなされてきた[*1]。石山や広沢などについて、永井和子氏は、平安京以外の空間を「周辺部」と定義し、かつ重要な設定がなされていると指摘される[*2]。本稿では、「周辺部」として九条・石山・広沢を取り上げ、「場」の持つ役割について考察する。まず、以下の【表】を御覧いただきたい。

【表】 作品別に見た地名の語彙数

	九条	石山	広沢	嵯峨	西山
大和物語	0	1	0	0	0
蜻蛉日記	0	2	0	0	1
うつほ物語	0	0	0	1	1
落窪物語	0	6	0	2	0
枕草子	1	1	0	1	0
和泉式部日記	0	3	0	0	0
源氏物語	2	9	0	6	1
栄花物語	51[*3]	5	1	3	0
更級日記	0	3	0	0	2
夜の寝覚	3	17	7	5	4
浜松中納言物語	0	2	0	0	0
大鏡	25[*4]	1	1	0	0

この【表】は作品別における、九条・石山や、広沢・嵯

峨・西山[*5]の語彙の使用例数である。ここでは平安期の散文作品の傾向を概括するために和歌を省いた[*6]。単純な語彙の使用例数を見ても、『夜の寝覚』は、長篇物語である『うつほ物語』や『源氏物語』と比べ、明らかに「周辺部」を重視していることが伺える。本稿は、「場」の新たな意味と、中の君と男君の齟齬を明らかにすることを目的とする。

なお、『夜の寝覚』は登場人物も多く、巻一から巻五にかけて呼称が変化する。そのため、本論においては、以後、中の君は「中の君」、姉大君は「大君」、源氏太政大臣は「父入道」、左衛門督中納言は「左衛門督」、右宰相中将は「宰相中将」、権中納言は「男君」、姫君は「石山の姫君」と統一し表記する。

一、土地の背景

「場」と人物の関係を見るにあたっては、まず、『夜の寝覚』における九条・石山・広沢の描かれ方、また、その土地の背景とも呼ぶべき歴史的常識を確認する必要があろう。

九条は、『夜の寝覚』の初めに見える天人降臨事件の後に描かれる。九条には、中の君の従兄にあたる法性寺の僧都が持つ別邸があり、中の君は、物忌のため僧都の妹である対の君と共に別邸に渡る。物語内において、九条にある別邸は、「いとをかしき所」（四九頁）「山里めかしくおもしろき所」（五〇頁）と描写されるものの、その他にも次のような描写がある。

1　こなたもかなたも竹のみしげりあひて、隔てつきづきしくも固めず、しどけなきに、（中略）こなたも竹多くしげりて、横たはれ広ごりたる松の木の陰にて、人見つくべくもあらず。軒近き透垣のもとにしげれる荻のもとに伝ひ寄りて見たまへば、池、遣水の流れ、庭の砂子などのをかしげなるに　（巻一・五二頁）[*7]

傍線部のように、邸の周りには手入れのされていない竹が生い茂っており、九条は、必ずしも完璧な風雅の地とは言い難い。では、このような描写のある九条とはどういった土地であるのか。朧谷寿氏は「地価の安い四条以南に比較的に住人が少なかった」「以北のように高級貴族の集住がなかった」「馬や牛の放牧場のような観を呈し、夜ともなれば盗賊のたむろする場と化した」と述べておられ、九条が貴族生活の中心地から外れていることが確認できる[*8]。このように平安期の九条といえば、九条大路、つまり平安京の端にあり、廃れ寂れている「場」であった[*9]。『夜の寝覚』における九条も、同様と見て良いだろう。このよ

うな「竹のみしげり」「山里めかしくおもしろき所」である九条は、貴族生活の中心として描かれる都とは言い難い。永井氏が九条を「周辺部」の土地と設定した所以であろう。[*10]

次に石山について確認しよう。石山は、主に中の君が出産する地として描かれる。『夜の寝覚』に登場する石山は、石山寺または石山寺に関係する「場」である。平安期における石山寺について、徳竹由明氏は「本尊如意輪観音の霊験あらたかな霊場として中古より名高く、西国三十三ヶ所の第十三番札所にも数えられる名刹である」と述べておられる[*11]。また、『枕草子』に、石山が霊山として取り上げられていることの指摘もされている。

寺は、壺坂。笠置。法輪。霊山は釈迦仏の御すみかなるがあはれなるなり。石山。粉河。志賀。（一九四段）[*12]

平安期には、石山詣が盛んになり、記録や文学作品にも採り上げられている[*13]。『夜の寝覚』が宇治十帖を意識しつつ物語を織りなしていることは言うまでもなく[*14]、石山と浮舟の関係も指摘されている[*15]。そのような霊山たる石山は、『夜の寝覚』において次のように描写される。

2　乳母、石山のわたりに領ずる所に、をかしき小家造りて、兄も、その寺の別当にてありければ、この二年ばかり、尼になりてそこに入り居たるが家こそ、いかなりとも、見る人あるまじく、よけれ（巻二・一五〇頁）

宰相中将の乳母の兄が石山寺の別当だという。石山寺では、中の君の安産を祈って祈祷がされ、寺の近くにある「家」では、中の君によって出産が行われている。石山は中の君と縁のある地と言えよう。

続いて広沢を確認する。広沢は、中の君の父源氏太政大臣が病気のために移り住んだ「場」である。巻二において初めて物語に描かれる。

3　年ごろ出家の本意おはして、終の御すみかに心とどめて造りたまへりける、広沢の池のわたりに、言ひ知らずおもしろき御堂に、渡りたまひぬ。（巻二・一四九頁）

父入道は、この地で出家し、中の君は、事あるごとに父のいる広沢の地を訪れる。この広沢は、物語内で多くの呼称を持ち、嵯峨や西山とも称される。そのため、ここでは土地として明確な「広沢池」と「嵯峨」を確認しておきたい。『古代地名大辞典』によると、

広沢池

山城国葛野群のうち。（中略）宇多天皇の孫寛朝僧正が広沢池を造ったとする伝説もある（拾芥抄）。（中略）古来、観月の名所であり、広沢池の月を詠んだ歌は多い。永祚元年10月、広沢池の北西に寛朝僧正が遍照寺を開き（小右記・百練抄）、東密事相を興隆しいわゆる広沢流の基を築いた。

嵯峨

山城国葛野群のうち。（中略）その地域は、「和名抄」櫟原郷の地に該当し、天皇・貴族の山荘景勝地、特に嵯峨天皇家のゆかりの地である。「枕草子」に「嵯峨野はさらなり」とあり、大堰川（大井川）の舟遊び、嵐山の紅葉とならぶ秋草花と虫の名所として名高く（栄花物語）、天皇・貴族の閑居・遊楽の地として詩歌に詠まれ、「源氏物語」「狭衣物語」など物語文学の舞台ともなっている。

とある。『夜の寝覚』における「広沢」は、広沢池のみを指すのではなく、嵯峨や西山を包括している。

以上、九条・石山・広沢について確認した。次節より、それぞれの「場」と人物との関わりについて見ていくこととする。

二、中の君と「場」

九条において、中の君は男君と出会い、そこで契りを交わす。中の君は、九条邸に突如として現れた男君に反抗する術もなく、男君と通じてしまう。次の本文がその場面である。

ア　人気におどろきて見返りたるほどに、やがて紛れて、姫君を奥のかたに引き入れたてまつる。人心地おぼえず、むくつけく恐ろしきに、ものもおぼえず。

（巻一・五五頁）

やむなく契りを交わした中の君だが、その相手は、姉の夫となる人物だった。この出来事によって、中の君の苦悩の人生が始まる。それと同時に、中の君は、望まない「恋人」を手に入れることになった。その舞台となった九条は、中の君に苦悩と「恋人」をもたらす「場」として描かれる。つまり九条は、二人の関係の起点となる「場」なのである。

次に、石山は、中の君が出産する地として登場する。出

産の地に石山が選ばれた理由を考える上で、始めに一条邸について確認する必要がある。一条邸は、中の君の亡き母が持っていた別邸で、中の君の療養のために使用される。

イ 所さりたるやうなれど、人目しげからずもあらず。「法師も男も、我が許にはありなそ。かしこに」とのみのたまへば、集ひ来るに、なかなかいと騒がし。左衛門督、ひまなく通ひ歩きたまふ、気色あやしとおぼし咎めてむ。（巻二・一五〇頁）

傍線部のごとく、一条邸は、「いと騒がし」く「人目しげからずもあら」ぬ「場」である。姉の夫と契ってしまったがために、人目を忍んで出産せねばならぬ中の君にとって、この一条邸は都合が悪かった。そこで、宰相中将が、**ウ**のごとく提案する。

ウ 乳母、石山のわたりに領ずる所に、をかしき小家造りて、兄も、その寺の別当にてありければ、この二年ばかり、尼になりてそこに入り居たるが家こそ、いかなりとも、見る人あるまじく、よけれ（巻二・一五〇頁）

宰相中将は、一条邸とは違った、**ウ**の傍線部「見る人あるまじ」き石山の「家」を、中の君の出産地として選んだ。この提案のとおりに、中の君一行は、左衛門督を伴い石山に赴く。この後、左衛門督は、「ここには宰相さぶらひたまふべきよしのみ、おぼしのたまふめれば、大納言の上一所にあづけたてまつりて便なければ、おのれは帰りなむ。」（巻二・一五二頁）と告げ、京へと帰る。そこで、宰相中将は、中の君の出産が露見しないよう、京にいる左衛門督宛てに、中の君が「よろしくなりたまへる」という手紙を送る。この中将の行動から、中の君の体調は良いから石山へ様子を見に来る必要はないと伝えることで、左衛門督を、石山に近づけさせまいとする意図が読み取れる。それは、中の君の出産が、左衛門督に気付かれないようにするためであった。つまり、石山を選ぶ条件として、「人目につかない」ことのみならず、「左衛門督が来ない」ことが必要だったのである。

また、次の**エ**を見ていただきたい。

エ 夜中の事も、御堂にては恐ろしかるべければ、おはする顔にし置きて、さるべき女房、侍は、みなさぶらはせて、御方ばかり、やをら、かの尼君の家に率てたてまつりたまふ。（巻二・一五二頁）

傍線部、人々を「おはする顔にし置」く行動は、二重傍線部のように、中の君が出産する地へ移動することを誰にも悟られないようにするための、いわゆる、カムフラージュなのである。これによって中の君は、人に知られることなく「家」へ移動することができ、無事出産に至った。また、石山寺があるおかげで、中の君の安産を祈って修法をも行うことができたのである。中の君が姫君（石山の姫君）を産んだ後、中の君は、石山に長く滞在することなく一条邸に戻る。一条邸に戻る際、中の君は、石山の姫君と別の車に乗り、姫君が乗る車を遅く出立させる。そのおかげで、逢坂の関で中の君を待っていた左衛門督は、先に出立した、中の君が乗る車と共に一条邸へと戻り、中の君一行は、姫君の存在を、左衛門督に知られる事なく一条邸へと運ぶことができた。この状況は、「人目につかない」かつ「左衛門督が来ない」石山があったからこそ、作ることができたのだ。

このように、石山は、姉の夫と契ってしまったがために、人目を忍んで出産せねばならぬ中の君にとって、また、娘を隠さねばならぬ中の君にとって、非常に都合の良い「場」であった。言うなれば、中の君は、この「石山」があったために出産を行うことができたのだ。石山は一般とは異なる特別な「場」なのである。

中の君は、この特別な「場」での出産を経て、「母」となった。姫君を出産した後の中の君は、「母」として、亡き夫（故関白）の娘たちのために心を砕くようになる。次の一文である。

オ　継母の上の、思ひいたり深くかしづき、御心に入れて、身こそかく御垣のほかにかけ離れたまひしかど、こまかに言ひて、あまたの御目移しにたち並ぶべうも、よろづ、なべてならず、思ひ扱ひたまへるさまのなのめならず。

（巻四・三八九頁）

石山という「場」があったからこそ、中の君は、「母」という属性を得ることができた。そして、石山で得た「母」の属性は、中の君の人生において失われることはなく、中の君は、自身の娘達のため、**オ**のごとく「母」という役割を果たし続ける。つまり、この石山は、中の君の、「母」という人生の始まりの「場」と言えるのである。

続いて広沢について考察しよう。中の君が初めて広沢に赴くのは、太政大臣邸で男君と中の君の噂が流れ、父入道が彼女を広沢に呼び寄せる場面である。この広沢で、父入道は、京にいた時よりも心を尽くして中の君の世話をする。

中の君も、次の**力**のように、

力　はかなきことにつけてももてなしおぼしたるを見るに、いみじくあはれなれば、我も憂かりし古里よりは、すこし世のつねにはればれしくもてなしたまひたれば

（巻二・二二六頁）

と、気持ちを軽くしている。このような広沢での中の君について、野口元大氏は、次のように述べておられる[*16]。

彼女（中の君：引用者注）が父の全面的な保護を得るためには、十五、六歳のころにそうであったように、汚れを知らない純真さのままでなければならなかった（中略）ヒロインの性行を評するに、しきりに「心幼し」とか「若の御心や」とかいう言葉が重ねられる。これは、広沢に籠っているときの彼女の特徴なのであって、彼女が再び京中の生活に戻ってからは、一度としてこの評語は用いられることがない。

つまり、中の君は広沢で、父入道の庇護のもと、父の「娘」たる自分を取り戻すのだと言える。このことは、広沢での中の君の態度や考えからも見ることができる。次の文は、中の君が、男君との関係を父に知られる事をひどく恐れている場面である。

キ　姫君、「（父は）いかなる事をおぼすらむ」とおぼすに、恥かしくわりなくて、涙落ち添ひたまひぬる気色、いといとらうたげなり。

（巻二・二二五頁）

また、男君が中の君に会うため広沢へ参上する場面でも、

ク　つと（男君が）添ひたまへるも、恥かしう、つつましう、「入道殿はいかが見聞きたまふらむ」と思ふも、わびしければ、「なほ、ここにてはさらぬ顔に。端のかたにを」ときこえたまへど、聞き入るべうもあらず。

（巻五・四七六頁）

と、父の評価を気にし、男君と距離を取ろうとする。しかし、これらに対して、都での中の君の描写を見たい。

ケ　「…いみじかりつる心地のまどひのなかにも、まづ、『あないみじ。内の大臣、いかに聞きおぼさむ』と、うちおぼゆることのみ、先に立ちつるも…」

（巻三・三一三頁）

中の君は、帝からの求愛に対して**ケ**の傍線部のごとく考える。広沢では、男君と距離を取ろうとしたにもかかわらず、都では、男君がどう思うかを気にしているのだ。中の君は、父入道が住まう広沢においては、**キク**の傍線部のごとく、男君よりも父入道を優先する。しかし、父入道のいない都での場面になると、中の君の心は、**ケ**のように男君へと向かって行く。広沢に、父入道が存在することにより、中の君の気持ちは、父へと向けられ、男君への気持は離れていく。これは中の君が、男君との関係を父に知られることを恐れ、自ら男君と距離をとろうとするから、と考えられる。

このように見てくると、広沢は、中の君が父入道の子、つまり「娘」という属性が強調される「場」であり、また、中の君の、男君に対する気持ちが遠のくことを強調する「場」なのである。

以上、中の君と「場」の関係について確認した。中の君は、九条において、男君の「恋人」という属性を獲得した。九条は、二人の関係の起点となる「場」であった。また、石山において、中の君は、男君の子を産み、「母」となった。石山は、中の君の「母」という人生の始まりの「場」であった。広沢において、そこには中の君の父が住まい、中の君は、広沢で父の娘として振る舞う。広沢は、中の君の「娘」としての属性を強調する「場」であり、中の君と男君の距離が離れることを強調する「場」であるとまとめられよう。次節より男君について見ていこう。

三、男君と「場」

では、男君と「場」の関わりはどうであろうか。まず九条を考えよう。男君は、九条で出会った中の君を、但馬守の三女と誤認していた。契った相手が、自分の婚約者の妹とは知らなかったのである。

A　我も人も、あいなかりける人違に、あらぬ名のりを変へつつ、はかなく空にただよひて、たがひにかかる契りの、前の世まで恨めしきに　（巻一・一〇二頁）

男君は、中の君の姉大君を妻に迎えていたため、一度は中の君から離れようとする。それでも中の君を忘れることができず、中の君に迫ろうとするのだが、中の君側は、男君の気持ちに応えない。男君の、中の君に対する恋情は募る一方だが、二人の縁はそれを許さないのである。このように、男君にとっても、九条は、苦悩に満ちた「恋人」と

しての始まりの「場」となる。

次に石山について見よう。男君は、石山で、石山の姫君の誕生を機に「父」となる。男君は、石山の姫君を自邸（関白邸）へと引き取り、娘を育てることとなる。しかし、その後の男君は、石山の姫君を見ると、事あるごとに中の君を思い出してしまう。

B　姫君の這ひ歩きたまふを見たまひて、うつくしみたまひつつ、「あはれ、山里に、（中の君は）いかに思ふこと繁う、ながめたまふらむ」とおぼしやりて

（巻二・二三二頁）

C　見るより、ところせくこぼれ出でたるやうなるは、恨めしき人、ふと思い出でらるるに　（巻三・二五五頁）

男君の、「父」となるも、表立って妻にできない「恋人」中の君への思いは、消えることがない。石山の象徴でもある石山の姫君を見て、さらに中の君に対する思いを募らせるのだ。つまり、石山は、男君に「父」としての属性を与えた「場」であり、「恋人」として、中の君への思いをさらに深めていく「場」として機能するのだと言える。

また、石山の機能はそれだけにとどまらない。次の本文を御覧いただきたい。

D　大殿を見るに、中宮の御光のみ、いみじき幸にておはしますべかめり。我はなにばかりの事かある。これを見れば、男は口惜しく、女はかしこきもの、と思う筋にてさへあれば　（巻二・一六五頁）

傍線部は、男君の父、関白の考えである。当時は、傍線部のごとく、子どもは、男よりも中宮になり得る女の方が、政治的メリットがあるとされていた。男君は、この「かしこきもの」、女児を石山で得る。後にも、男君は、将来、石山の姫君を入内させようと考えており、そうなると、姫君を通して、男君と皇族の関係はより近しいものとなる可能性が出てくる。つまり、石山は、政治の駒となる女児を男君に与えた「場」とも言えるのだ。

続いて、広沢について見てみよう。広沢は、入道の住まう「場」であり、中の君が滞在する「場」である。男君にとって、広沢は中の君を尋ねていく「場」であろう。男君は、正妻である女一宮がいるにも関わらず、都から遠く離れた広沢にいる中の君を思慕し続ける。その心は、次の一文からも読み取ることが出来る。

E　「きびしき憂き世のあたりをも飽き果てて、籠り居たまひたれば、つゆばかりの言の通ひ、絶え果てぬるなめり」とおぼすに、心細く、胸いたくて　（巻二・二二六頁）

Eと考えた後、男君は、足繁く広沢へと通う。もちろん、公務によって、忙しく広沢へ赴くことができない場合も多くある。しかし、それでも、男君の、中の君へ向かう心が変わることはないのである。

F　暇なく事繁き御身に、里遠き御すみかの程、いみじくおぼつかなくのみおぼゆるを、「今は出でさせたまひね」とのみきこえさせたまへど　（巻五・五一三頁）

それどころか男君は、Fのごとく、中の君を思う余り、自邸に呼び寄せようと画策する。離れればこそ、思いが弱まるどころか、中の君を恋い慕う心はさらに強くなるのである。広沢は、このような、男君の、中の君を「妻」あるいは「恋人」として追い求める気持ちを、強く認識させる「場」なのだ。石山同様、広沢も、男君にとって、中の君への思いを深める「場」となっている。

また、広沢において、男君は政治的に得るものがある。次の本文から確認したい。

G　いとど御心地もかき乱るるやうになりまさりて、いみじく苦しげにしたまへば（中略）上達部、殿上人参り込みて、いともの騒がしきに、今日ぞ新中納言も参りたまへる。（中略）大納言、宰相中将の御方々もおどろき渡り集りたまふ。　（巻五・四九七頁）

H　殿のおはしますあとを尋ね、権大納言、新大納言、宰相中将をはじめとして、上達部、殿上人ひき連れ競ひ参りたるに　（巻五・五一八頁）

広沢には、たびたび父入道の息子や娘、その近しい者たちが集まる。父入道に会うという理由だけではなく、中の君の病気を見舞ったり、管弦の演奏をしたりと、多くの人々が訪れる。そして、そこに集まる人物は、GHの傍線部「上達部や殿上人」といった、男君の家族ではない政界の実力者である。つまり、この広沢という父入道の住まう「場」が、一転して政治交流の「場」となるのだ。「上達部や殿上人」が男君に付き従ってやって来ることは、男君の地位の大きさを示す事にもなる。男君は、この都から離れた広沢の地でも、政界における多くの実力者を付き従えるほどの人物

と評価され得るのである。

男君の正妻についても確認しておきたい。男君の正妻女一宮は、朱雀院を父に持つ。それだけでも男君にとって政治的な利点は大きい。子があれば、それはさらに盤石なものとなろう。次に引く本文は、男君が、院の動向を気にして、療養のため朱雀院へと移っていた女一宮を自邸へと戻す場面である。

ー　院の御覧ぜむところを、あながちにつくろふも苦しければ、「わづらひし所とても、かならず、かくやは離れさせたまふ。おはします所近くさぶらふも、いとかしこきを。渡らせたまはむ」と勧めて、渡いたてまつらせたまひつ。　（巻四・四四七頁）

本文ーのごとく、男君は、強力な後見を持つ女一宮を無下に扱うことができない。そのため、男君は、都から距離のある広沢へ思うように向かえず、自然と女一宮と過ごす時間は増え、御子誕生の可能性が高まる。これは、中の君が広沢にいなければ為し得ないことである。つまり、広沢があればこそ、男君は女一宮との時間を増やすに至ったのだ。

このように、広沢は、男君の、中の君への思いを深める「場」である一方、男君の、政治的メリットを作る「場」としても機能しているのである。

以上、男君と「場」の関わりを確認した。九条では、男君も中の君同様、中の君の「恋人」としての人生が始まった。石山では、男君は、「父」となるも、表立って妻にはできない中の君、「恋人」である中の君への思いが消えることがなく、さらに中の君に拘泥していく。広沢では、「恋人」または「妻」である中の君を恋い慕う心を強く認識している。九条から始まった、男君が中の君を求める心は、石山や広沢を経てさらに強まるのである。また、それだけではなく、石山は、政治の駒となる女児を獲得した「場」、広沢は、男君の政治的メリットを作る「場」としても機能しているのだ。

四、中の君と男君における「場」の影響

さて、ここまで、中の君や男君と、それぞれの「場」の関係について述べてきた。九条・石山・広沢という「周辺部」は、中の君には「恋人」・「母」・「娘」という属性を与え、中の君の生き方に多面的な光を当てた。男君には「恋人」や「父」という属性を与え、それだけでなく、「場」が、政治的地位を向上させるきっかけの一つとなり、新たな変

化も与えた。このような、人物をある「場」へ移動することによって物語を展開する方法は、既に『源氏物語』において試みられていた。加藤昌嘉氏は、「薫や匂宮、中君や浮舟、浮舟の母君や乳母、右近や侍従、家司や隨身たちは、物語の要請に応じて、そのつど、各所へ移動せしめられる。」[*17]と述べておられる。つまり、『夜の寝覚』も、『源氏物語』同様、物語が次の段階へ進むために「場」が利用されているのである。だとすると、これまで見た、「場」が二人に与えた属性、または「場」の持つ機能は、中の君と男君の関係に、いかなる影響を与えているのであろうか。

まず九条より確認していこう。中の君と男君は、九条で「恋人」となったが、二人は、心を通わせたわけではない。九条で契りを交わしたことは、アのごとく、中の君にとって、恐怖に身がすくんだ状況下での出来事であり、その後も、中の君は、起き上がれぬほど憔悴してしまう。お互いの正体が露見し、男君が中の君へ情を寄せても、中の君は、男君に怯える一方であった。二人は、契りを交わした「恋人」であるにもかかわらず、そこには、中の君と男君の、互いに対する思いの違い、即ち齟齬が生じているのである。

では、石山はどうであろうか。中の君は、石山の姫君を出産したことにより「母」となった。それ以降も、オのごとく、自分の娘たちのために親として心を砕いている。一方、男君は、石山の姫君の「父」となった。しかし、「父」である男君は、子を見ると中の君を思い出し、中の君への思いを募らせるばかりであることがBCから読み取れる。ここに、「母」として生きる中の君と、中の君の「恋人」であろうとする男君という、二人の考え方に乖離が見られる。

続いて広沢も確認する。広沢における中の君は、キクのごとく、男君との関係を父に知られることを恐れ、父入道の「娘」であろうとした。そのような中の君に対し、男君は、都から遠く離れた広沢へ足を運ぶほど中の君を思慕し、また、都にいる間も中の君への思いを募らせ続ける（EF）。ここにも、男君から離れようとする中の君と、中の君に近づこうとする男君という、二人の考えの乖離が見られるのである。

以上のごとく、中の君は、「場」によって与えられた属性に適応することができる。しかし、男君は、与えられた属性に適応できず、中の君に拘泥する。このような男君は、変化のきっかけを与えられても変化をしない人物のごとく捉えられる。しかし、前述の通り、男君の政治的地位は向上している。政治的地位の向上によって、男君は、尚更強力な後ろ盾を持つ正妻を無下には出来なくなる。そうなると、当然、中の君を追いかけることは困難となってこよう。

ここにも、男君の、中の君を手にしたいという願望と、政治的地位が向上していく故に、中の君だけに心を砕くことが出来なくなるという現実との相違が生じているのだ。要するに、「場」が中の君と男君に与えた属性、あるいは「場」の持つ機能によって、二人の間の、様々な乖離が強調されるのである。

おわりに

本稿では、中の君と男君、それぞれにおける「場」の役割を確認し、それが二人の関係に、いかなる影響を与えているのかを分析した。その結果、「周辺部」である九条・石山・広沢は、中の君に「恋人」・「母」・「娘」という属性を与え、中の君は、それら属性に適応した。また、「周辺部」は、男君に「恋人」・「父」という属性を与えたが、男君は、それら属性に適応することができず、中の君に拘泥し続ける。一貫して中の君を思慕する男君だが、男君を取り巻く環境によって政治的地位が向上していくことで、正妻を無下にすることができなくなり、中の君を表立って愛することが困難になってしまう。二人の間だけではなく、男君個人においても、中の君を得たいが得られないという願望と現実の相違が見られるのである。つまり、『夜の寝覚』における「場」は、中の君と男君のさまざまな乖離を強調する機能も有するのである。

*1 鈴木弘道氏『寝覚物語の基礎的研究』（塙書房、一九七三年）、永井和子氏「女主人公は何処に住むか―寝覚物語中の君の居所―」（『続　寝覚物語の研究』、笠間書院、一九九〇年）、野口元大氏『夜の寝覚　研究』（笠間書院、一九九〇年）、永井和子氏「夜半の寝覚論―山里の女性としての中の君―」（『平安時代の作家と作品』、武蔵野書院、一九九二年）など。

*2 注1の永井氏「女主人公は何処に住むか―寝覚物語中の君の居所―」に同じ。

*3 人物呼称である「九条殿」を含む。

*4 注3に同じ。

*5 永井氏は（注1の永井氏「夜半の寝覚論―山里の女性としての中の君―」に同じ）において、『夜の寝覚』では「西山」「嵯峨（野）」が広沢の別称であることを述べておられるが、他作品では必ずしも「広沢」と「西山」「嵯峨」が同じ土地として描かれるわけではないため、本【表】では、それぞれ区別して掲出している。

*6 【表】に掲出した作品以外で、調査に用いたものは以下の通り。『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』『平中物語』『讃岐典侍日記』『とりかへばや物語』。これらには「九条」「石山」「広沢」「嵯峨」「西山」の語彙は見られなかった。

*7 本文の引用および頁数は、島原本を底本とし、前田本を校訂に用いる『日本古典文学全集』（小学館）に拠るものとする。また、すべての引用文中の傍線は稿者が付したものである。以下同断。

*8 朧谷寿氏「平安京―王朝の風景―」（『平安貴族の環境』、至文堂、一九九四年）

*9 注8朧谷氏「平安京―王朝の風景―」に同じ、池田亀鑑氏『平安時代の文学と生活』（至文堂、一九七八年）、古橋信孝氏『平安京の都市生活と郊外』（吉川弘文館、一九九八年）を参照。

*10 九条について、当時の認識を整理する便宜のために、あくまで一参考として『古代地名大辞典』を一瞥しておきたいと思う。以下本文である。

「くじょう　九条〈京都府京都市〉

平安期に見える地名。狭義には現在の京都市南区のうち平安京の九条大路を中心とする地域をいう。」

*11 徳竹由明氏「石山寺開基伝承の形成」（『日本文学』五二巻三号、二〇〇三年）

*12 『新日本古典文学大系』（岩波書店）に拠る。

*13 石山についても、当時の認識を整理する便宜のために、あくまで一参考として『古代地名大辞典』を一瞥しておきたいと思う。以下本文である。

「石山

近江国滋賀郡のうち。（中略）平安期に入って石山寺が真言道場に転ずると、当時の密教崇敬の風潮ともあいまって皇族をはじめ都城貴顕の石山詣でが盛んとなり、石山はしばしば記録や文学作品に採り上げられるようになった。周辺の風光明媚なることは古来より著名であり（後略）」

*14 永井和子氏「宇治十帖と寝覚物語―作者と読者の問題―」（『続寝覚物語の研究』、笠間書院、一九九〇年）その他多数の方々により『夜の寝覚』のはじめは宇治十帖に似ているが、その後は宇治十帖と重ねたりずらしたりすることで物語を展開していると指摘がされる。

*15 山田利博氏「『源氏物語』における初瀬と石山―玉鬘物語と浮舟物語をめぐって―」（『国文学研究』八七号、一九八五年十月）

*16 野口元大氏「第三部における人間の認識」（『夜の寝覚研究』、笠間書院、一九九〇年）

*17 加藤昌嘉氏「情況設定と人物布置―早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉巻―」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂、二〇〇三年）